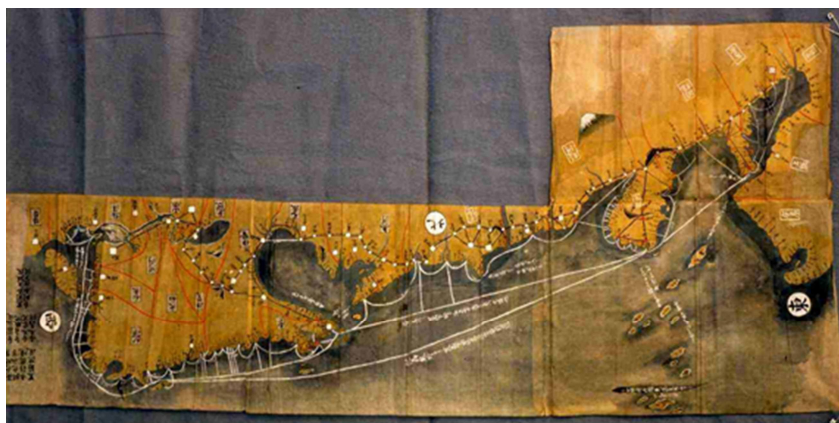


静岡県歴史文化情報センターの資料紹介

ひよりまちみなと ほうがくいし 日和待湊と方角石

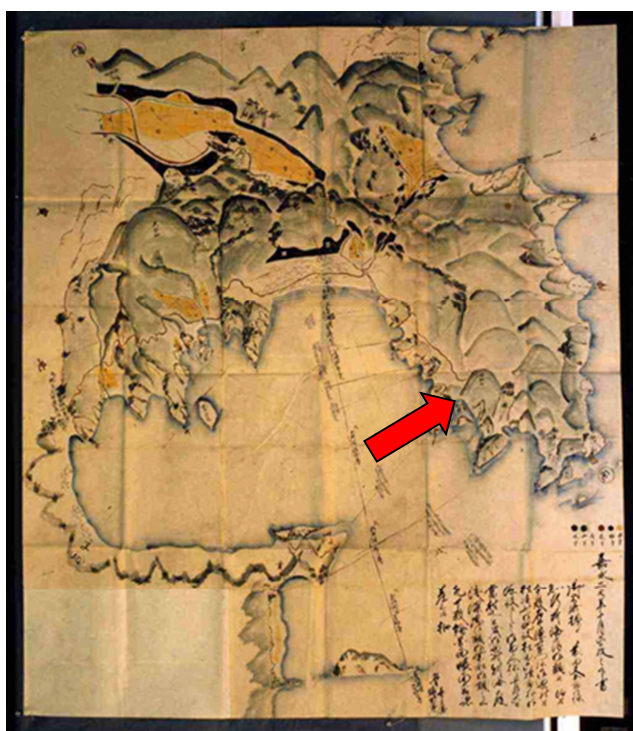
江戸時代の17世紀、東廻り・西廻り航路が開発され、全国的な海上輸送ルートが整備されました。中でも「天下の台所」と呼ばれ全国の物資の集散地であった大坂と、幕府が置かれた大消費地江戸を結ぶ航路は、物流の大動脈となりました。江戸・大坂航路では菱垣廻船、樽廻船などが活躍しました。



資料1 大坂・江戸間の航路

いずれの輸送でも弁財船と呼ばれる帆船が使われ、沿岸の山や岬などの地形を頼りに航行しました（地乗り航法）。

船乗りたちは港で気象を観察し、航海可能な昼の時間を勘案し、次の寄港地を定めて出帆しました。そして、いくつかの寄港地を経て目的地に到達した。この寄港地のことを日和待湊と言います。日和待湊は、順風の吹き出すのを待つことから風待湊とも呼ばれました。



資料2 妻良子浦

伊豆半島南西部には、妻良、子浦、長津呂（現在の石廊崎）、下田等の著名な日和待湊がありました。日和待湊では、廻船の入港を補助する人足を手配したり、船宿を設けたりするなど、廻船の便宜を図りました。時に船荷の取引が行われ、港の人々に利益をもたらしました。

伊豆西海岸の日和待湊から関西方面に向かう場合、途中適当な港がないため、出港したら最後、海の難所として知られた遠州灘を越え、一気に鳥羽や的矢浦など伊勢の港までたどり着かなければなりません。そのため、日和待湊では雲、風、潮の動きなどを観察して出港のタイミング

を見極める観天望氣（今で言う気象予測）が非常に重要でした。

日和待湊の近くにはたいてい日和山ひよりやまと呼ばれる眺望の良い山が設定され、方角石を利用して観天望気が行われました。子浦日和山では以下の点に注意して観天望気を行いました。

- ①日の出、日の入、②御前崎近海の海況、③沖手筋の海と雲、④下手筋（沖手に対して海岸近くの意か）の波と風の状況、⑤内海（駿河湾）の風向き、波、⑥磯元の海況
⑦地山（その土地の山）の雲と風、⑧子浦・妻良間の海況

江戸時代後期の伊豆地方の風土や文化について記した海若子かいじゃくしの『伊豆日記』には、観望天気の名人として船頭たちから絶大な信頼のあった、船宿・御影屋みかげやの逸話が取り上げられています。



資料3 方角石



資料4 方角石より海上を望む

【資料1】は江戸時代の大坂・江戸間の航路を描いたものです。伊豆半島先端から志摩半島の鳥羽・大湊等に直行する当時のメインルートが確認できます。（「浦方略絵図」妻良区有文書（南伊豆町）歴史文化情報センター請求番号：24014-近世写真集51-k001s）

【資料2】は妻良子浦湊を描いたものです。大きく湾入した地形から、当地が良港であることがわかります。図中、湾の上端に妻良湊、左端に子浦湊。矢印の位置に日和山があります。（「前田又五郎様知行所海岸調図」妻良区有文書（南伊豆町）歴史文化情報センター請求番号：24014-近世写真集51-k006s）

【資料3】は方角石の写真です。方角石は日和山の頂上に観天望気のために据えられた円筒形の石で、写真は子浦のもので、東西南北並びに北東、東南、南西、北西の8方位が刻まれていました。（歴史文化情報センター請求番号：24023-近世写真集51-k001s 県史編さん室撮影）

【資料4】は妻良の日和山の方角石から海上を望んだものです。（歴史文化情報センター請求番号：24024-近世写真集51-k001s 県史編さん室撮影）

《参考文献》

若林淳之 『海の東海道』 静岡新聞社 1998.7 S683-54

富秋園海若子 『伊豆日記』 文政4年（1821）長倉書店1975.3復刻 S291.1-16

『南伊豆町史 通史編 上巻』 2024.3 S211-74

『静岡県史 通史編3 近世一』 1996.3 p821-822 S209-3-3